

ご めいぶん こ きつかわ ご めいこうほんるいなら かんけい し りよう
五明文庫（吉川五明稿本類並びに関係資料）

- 1 種 別 有形文化財（書跡・典籍）
- 2 名称及び員数 五明文庫（吉川五明稿本類並びに関係資料） 232点附44点
- 3 年 代 江戸時代中期～後期
- 4 材質・寸法等 別紙のとおり
- 5 所 在 地 秋田市千秋明德町4番4号 秋田市立中央図書館明德館
- 6 所 有 者 個人
- 7 管理責任者 秋田市立中央図書館明德館長
- 8 説 明

吉川五明（幼名伊五郎、のち正九郎、宗七郎兄之、祐之、隠居後に了阿）は、享保16年（1731）に那波三郎右衛門祐祥の五男として久保田城下茶町菊之丁に生まれた。18歳で同じ茶町菊之丁の吉川惣右衛門吉品の養子となり、22歳のとき吉品の長女律と結婚して分家した。養父死後、義弟を後見して家業の隆盛を支えた。安永7年（1778）に隠居、享和3年（1803）73歳で没した。

少年期から俳諧に親しみ、はじめ京の正木風状や大坂の松木淡々らの影響を受けて滑稽味や言葉遊びをもっぱらにした句を多く作った。やがて談林風の平俗な句作に疑問を抱いて芭蕉を独学し、宝暦12年（1762）俳号を五明と改めたころを境に、自然観照を基本とし叙情や感傷をたたえた蕉風へと大きく転換する。明和5年（1768）『四季の友』を撰して蕉風復古を宣言し、蕉風復帰を牽引した与謝蕪村、加藤晁台ら諸国俳人と幅広く交流し、明和の中興俳諧運動の奥羽における中心的役割を担った。隠居後は、天明2年（1782）川尻に小夜庵を結び、六百の門弟の指導をし、全国の俳友と交流を結びながら句作を深めた。

吉川家に代々伝わる自筆俳書等の資料群が五明文庫として秋田市立中央図書館明德館に寄託されている。初期の句を撰した『たもとくそ』（宝暦11年（1761））、『四季の友』に始まり蕉風を追究する年々の撰集、『小夜話』（安永9年（1780）頃）等の俳論、さらに『猿蓑』（向井去来・野沢凡兆編、元禄4年（1691）刊）など芭蕉研究のために収集した俳書などから五明の俳諧の深化の歩みを見ることができる。また、「五明住所録」（寛政7年（1795）頃まで）などの関係資料からは諸国俳人や門弟との幅広い交流も窺える。

五明文庫は、芸術性の高みを求めた五明の俳諧を今に伝えるだけでなく、明和の中興俳諧運動の軌跡を物語るものとして江戸時代中期から後期の日本の文芸史をたどる上で貴重である。

参考

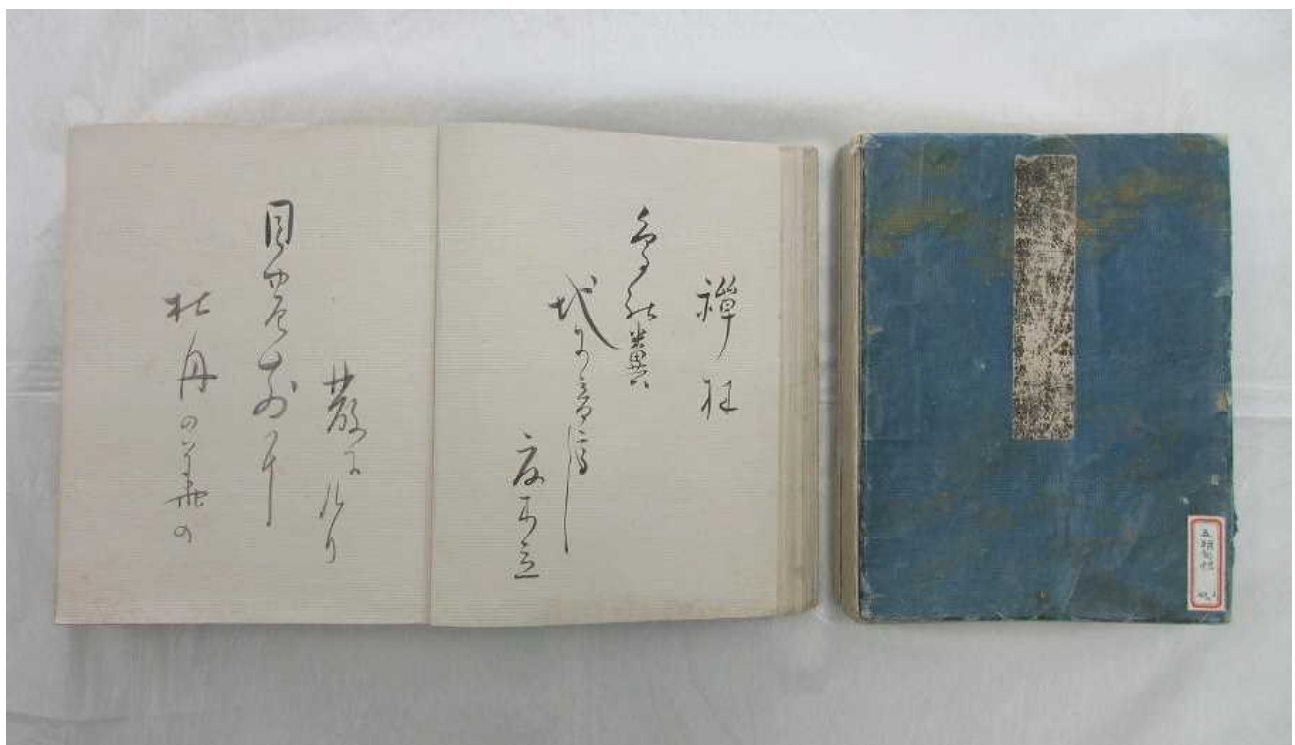
秋田市指定有形文化財（歴史資料）「五明文庫」 昭和54年（1979）10月9日 追加指定昭和60年（1985）3月1日

参考文献

藤原弘 編 『秋田俳書体系 吉川五明集上』 秋田俳文学の会 昭和49年（1974）11月30日
藤原弘 編 『秋田俳書体系 吉川五明集下』 秋田俳文学の会 昭和51年（1976）11月30日
藤原弘 『秋田俳諧考説』 私家版 昭和62年（1987）9月9日



上段：『四季の友 春』、『しきの友 夏』、『四季の友 冬』（いずれも五明稿本）
下段：『小夜話』（五明著、野松写）



左：『句藻 上』、右：『句藻 下』（いずれも五明稿本）